THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

第9号
広報委員会発行

関西大学通信

大阪府吹田市山手町3丁目
関西大学広報委員会

昭和45年度予算決まる

周知のように、昨年六月以来の紛争による破壊で本学の受けた財政的被害は大きく、法人の推定によれば、被害額は一億数千万円に達し、また、工学部特別詮衡入学制度廃止に伴う財源喪失により法人予算の編成が注目されていたが、三月二十八日開催の評議員会で審議の結果、承認議決された。その概要は次のとおりである。

予算編成の方針を法人当局にきけば、まず教育研究の充実を最重点としているが、長期にわたる学費の据置きに加え、年々上昇する人件費の改訂、および諸物価の高騰による物件費の騰勢、ならびに工学部特別詮衡入学制度の廃止に伴う財源の欠落などを考慮して、緊縮財政の方向をとらざるを得ない。すなわち

(1) 人件費については、長期計画による教育職員の充実（二十二名）を考慮し、待遇改善は人事院の勧告を予想し、ベース・アップ分として七%の増額を計上する。

(2) 物件費については、合理化節約を計り、効率的運用をもってその成果を達成するよう配慮することとし、原則として昭和四十四年度予算の枠内にとどめる。

(3) 施設設備については、これを最少限度にとどめるが、総合グラウンド用の一部賃借している土地購入は行なうこととする。

なお、暴力による破壊活動は全学をあげてこれを防止するが万一破壊を受けた場合、その修復作業は最少限の応急処理の程度とする。

(4) 国庫助成金の増額については、促進同盟の議長校として本学も努力を重ねているが、積極的な協力により、懸案であった「人件費を含む経常経費助成」が実現し、その分が収入予算に唯一つの新財源として見込めることとなった。ただ、補助額が私学側の要望とはかけはなれた少額であり、また配分基準が不明であるが推定として八千万円を計上する。

以上の方針にもとづいて編成作業が進められており、経常収支において二億一千五百二十万四千円の不足額を生じ、四十六年三月末における累積借入額は十六億六千万円余となる予定である。その内訳は私学振興会十億百万円、学債一億八千百万円、銀行四億八千四百万円となり、四十四年度より三千三百万円の増額で、長期的に見て借入額の限度に近いものと考えられている。便宜上、予算の総括を示すと、別表1のとおりで、昭和四十五年度予算規模は総額三十七億六千九百九十六万円で昨年度より二億五千九百五十六万五千円の増額であり、伸び率四・四%である。

まず収入の部からみると、学生納付金は二十八億三千二百七十万三千円で全収入の七五・二%を占めており、本学財政の支柱となっている。学生納付金の計算の基準となる学生・生徒・園児数は、大学院二百七十五名、大学第一部一万八千七百名、第二部四千五十五名、高校一千四百名、中学校四百四十名、幼稚園三百五十五名で、総計二万五千二百二十五名となっている。これは四十四年度予算の学生数と殆んど変りがない。

政府および地方自治体からの補助金収入は、一億九千九百五十六万で、五・三%となり昨年に比べて八千三百二十四万七千円の増額で、四十五年度から新設される経常費補助金八千万円がそれに該当する。

寄付金は七千六百万円で二%に当り、一億三千三百二十三万円の減少となっているが、工学部特別詮衡入学制度の廃止に原因がある。

雑収入八千七百六十七万二千円は二・三%で、一億四千四百四十二万円の減少は、昭和四十三年度文部省補助金の交付が遅れ、その収入が四十四年度に繰り延べられて収入となったのである。

以上にみた収入額の合計三十一億九千五百九十三万五千円と、総支出額との比較において生じた収入不足額が、当該年度の借入金であって、五億七千四百二万五千円で一五・二%となり、これを前年度と比較すると、三億四千八百二十八万五千円の増額となっているが、その主な要因は人件費の増加と寄付金の減収などである。

次に支出の部をみると、人件費は二十億五千八百四十六万四千円で総支出額に対して五四・六%に当たるが、これは学生納付金の七二・七%を占めるものである。教育職員五三七名、事務職員四三二名、計九六九名の専任職員と非常勤講師六一九名、総合計一、五八八名の給与ならびに定期昇給・ベースアップを含んでいる。これを昨年度と比較すると、一億七千九百六十二万七千円の増額となり、増加率九・六%となる。

教育研究費は四億九千六百五十五万四千円で二一%、昨年に比べて四千三百十九万四千円の減額となっている。これは間接部門の合理化、経費の節約を強力に推進し、併せて能率の向上に努力し、もって節減による効果のないよう、十分に配慮しなければならないであろう。

施設費は二億二千九十一万円で五・六%、昨年に比し九千七百九十五万三千円の増額になっているが、これは総合グラウンドなどの用地買収費がその主なものである。

償還金五億四千百三十九万円は一四・四%に当たり、昨年に比べて三千三百六十七万円の減少となっているが、これは学債の償還額が減少したためである。

繰出金三千七百万円は奨学金、厚生資金、拡充資金の合計額で一%に当たり、昨年より五千三十万円の減少となっているが、これは昨年度は新設の施設補修特別会計へ五千万円の繰出しを行なったが、本年はこれを行なわないために減少となった。

なお、特別会計は各区分に従って一般会計と切り離して、その収支を明らかにするために設けられた会計であり、その概要は次のとおりである。

(1) 退職慰労金の支出金は、教職員の定年退職者十五名および依願退職者の年間支出予定額である。

(2) 年金基金の支出金は、普通年金、一時金などの支出予定額である。

(3) 奨学金は、毎年一千万円を限度として、希望学生のうちから二百名余りを選考して貸付ける資金である。

(4) 厚生資金は、教職員の住宅資金および短期の厚生資金の貸付のための資金である。

(5) 奨学基金、拡充基金、収益事業資金、寄付保険は殆んど休止状態で、毎年基金利子を加算して翌年に繰り越されている。

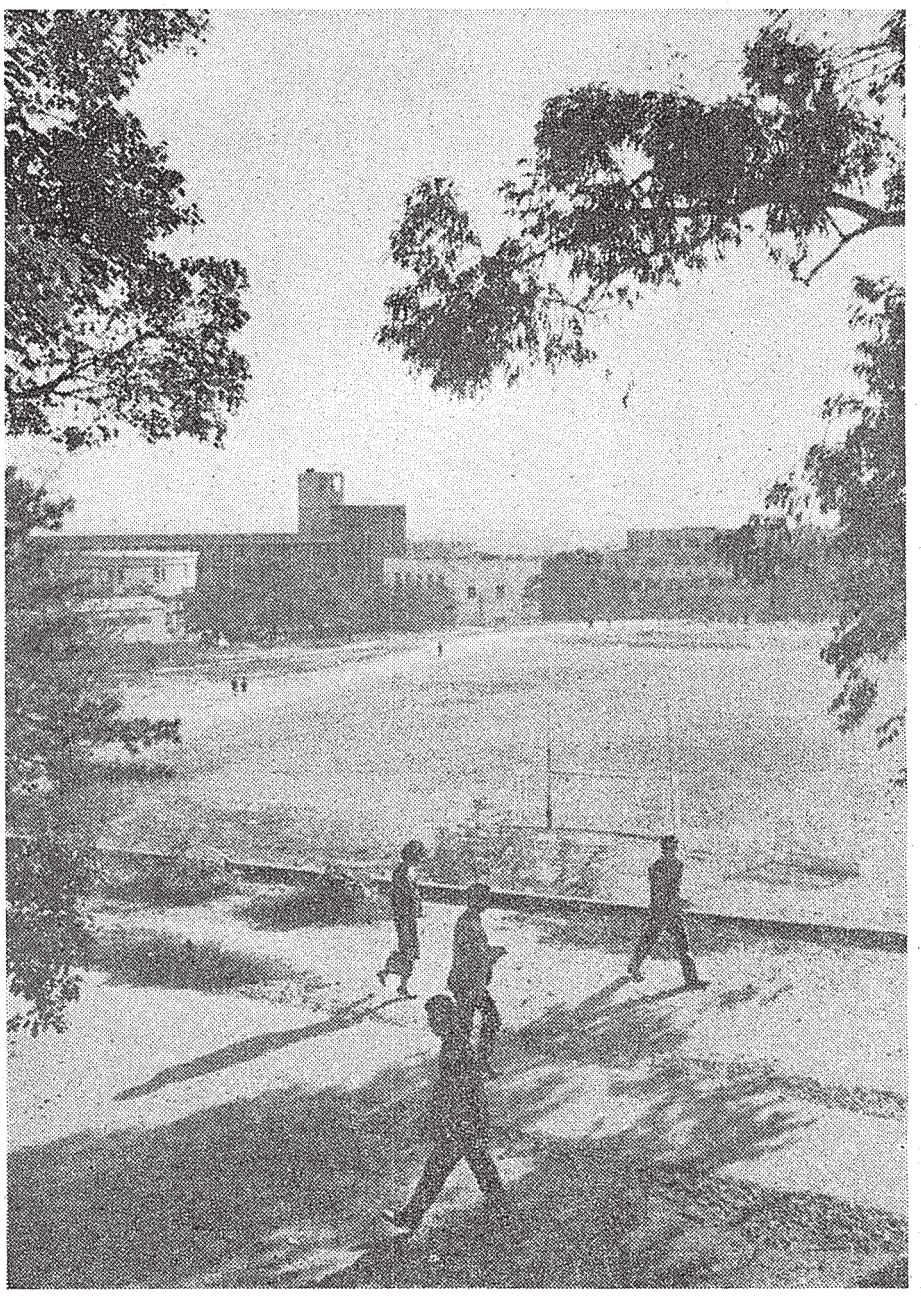
(6) 拡充資金は、高校・中学校の施設拡充のための資金を積み立てている会計である。

(7) 出版事業資金は、大学の教科書および学術研究図書等の刊行を行なうための資金であって、毎年五百万円を越す出版事業を予定している。

(8) 施設補修は、紛争による学舎の損傷を修復するための資金である。

以上は、昭和四十五年度予算の概要であるが、今後の財政事情は楽観を許さないものがあり、いかに教学優先の理念を掲げても、教学側が学部の適正規模を考慮しない限り、財政的困窮は本会計への悪影響はもちろんのこと、特別会計の破綻を来たすことは必至であり、それがまた教学内容の悪化や、教育職員の学外流出の傾向をうむことにもなろう。第三・四面に掲載した別表2は予算の細目であり、これを図表化すると別表3のようになる。

教育研究の充実に重点
手痛い"紛争、物価高騰"
教学優先だが学部の適正規模を考慮



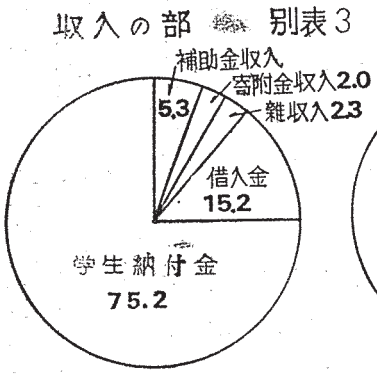
収支予算総括表

別表1　（単位千円）

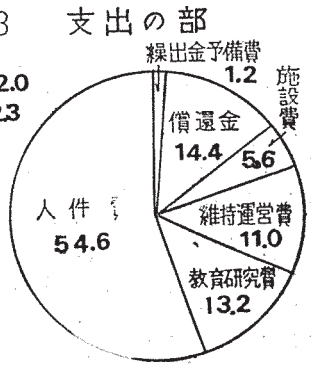
項目	昭和45年度	%	昭和44年度	%	比較増減
1学生納付金	2,832,703	75.2	2,827,020	78.3	5,683
2補助金収入	199,560	5.3	116,313	3.2	83,247
3寄付金収入	76,000	2.0	209,230	5.8	△ 133,230
4雑収入他	87,672	2.3	232,092	6.4	△ 144,420
小計	3,195,935		3,384,655		△ 188,720
5借入金	574,025	15.2	225,740	6.3	348,285
収入合計	3,769,960	100.0	3,610,395	100.0	159,565
1人件費	2,058,464	54.6	1,878,837	52.1	179,627
2教育研究費	496,554	13.2	487,405	13.5	9,149
3維持運営費	415,642	11.0	458,836	12.7	△ 43,194
4施設費	210,910	5.6	112,957	3.1	97,953
5償還金	541,390	14.4	575,060	15.9	△ 33,670
6繰出金	37,000	1.0	87,300	2.4	△ 50,300
7予備費	10,000	0.2	10,000	0.3	―
支出合計	3,769,960	100.0	3,610,395	100.0	159,565

別表3

収入の部



支出の部



千里眼

▼改革準備委員会から第一次答申が出され、大学改革もいよいよ本格的に検討されようとしている。デュール・ウォルブルは「組織の変更というものは新しい理想が古いものより本質的によいという理由はなくとも、ただ変更が新しい血を導入し若返りの機会を与えるという理由で正当化してよいものである」といっている。それはそれなりに意味がある。しかし単なる若返りだけに終ってはならない。古い新しいの問題は、価値があるかないかの問題とは別である▼今日の大学すなわちユニバーシティはウニベルシタスが語源で、ウニベルシタスには米ローニャ型のウニベルシタス・スコラリウムとパリ型のウニベルシタス・マギストロルムがあった。現在の大学は、教師中心のパリ型が発展したものであるが、学生参加は既に米ローニャのウニベルシタスでは行われていた。しかし、いづれも教師・学生の人間的結合関係（ソフト・ウエア）が主体であった▼わが国の「塾」について福沢諭吉は「福翁自伝」の中で「マア今日の学校とか学塾とかいうものは、人数も多くとても手に及ばないことで、その師弟の間はおのずから公なものになっている。けれども昔の学塾の師弟は正しく親子のとおり、……その扱いは実子と少しも違わないありさまであった。後世だんだんに世が開けて進んで来たならば、こんなことはなくなってしまいましょう」とその変ぼうを述べている▼当時でもそんな状態であったのに、現在のように学生数が多く「ユニバーシティからマルティバーシティへ」の時代ともなれば、ハード・ウエアは益々完備するであろうが、ソフト・ウアエの方がそれについてゆけなくなる可能性が大である。それだけに、新しい制度をつくるに際しては、将来の確固たるビジョンをもって慎重になされねばならない。（下）

就職戦線の見通し

早くも約六百社から推薦は技術系6月文科系7月から開始

四月および五月の不況説が論ずられようとするあが、四月三十日現在、約六百社の企業から求人があり、昨年の同時期よりはるかに早テンポで、就職戦線が開始されようとしている。このなかには、もちろん官本金二千万円に達しないような中小企業も入っているが、殆んどが大手企業であり、不況を吹き飛ばしどうな好況で開幕を迎えようとしている。

例年、求人時期の早期化が指摘されているが、ことに本年度は六月をピークとする日本経営改定への不安と、大学紛争による学園封鎖などを考慮し、例年よりまして早くなり、現在きている求人会社も、四月中に採用試験を施したいという早期刈りをおりしも現代賞が目立つようである。

就職課としては、大学の八団体と目録連、文部省の三者の間で設けられた紳士協定として、技術系は六月一日、文科系は七月一日以降に推薦を開始するという申し合せがあるため、このような期日以前に採用試験を施すという企業と交渉の結果、約五十社は協力を得られないで、現在自粛協会として、最少必要事項に関して第二次の試験などの話もあり、実際の採用は、四月二十日から実施されている就職面接を受けた学生の会議の中に、ある金融機関から直接採用試験を受けるよう勧誘の手紙が郵送されたとの話もあり、実際の採用試験は始まっていると言える。

社会学部へは50社

学生の求人活動に期待

新設学部である社会学部への求人は、現在五十社で法・経・商・教育学科などについて、求人依頼の電子・土木・建築学科、文学部会社約五千社に対して、案内を発送したり、会社訪問の際にもPRに務めて来たのであるが、現在この新設された社会学部と工学部の工学部と比較して非常に低調であるが、就職課としては、三年前から、就職課の中に、学生の求人活動に期待を寄せている。

はたして金融、メーカー、商社などからの求人が多いため、社会学部が不利と見られることもあり、今後の大幅な求人が期待される。最終的には、文学部より下回ることは、数不足からか、早期から多数の求人があり、逆に経済学部の減低に悩んでいる状況である。

昭和十四年度には五百百七社と昨年の増加が予想される。

また企業規模別にみても、巨大企業四十三年度二一・二%、大企業四十二年度三一・二%、大企業四十三年度三一・五%、中企業四十二年度三一・九%と合計一〇・〇%増のよい結果が出ている。本年度も既に年末で求人のこなかった巨大企業からの求人が目立ってきている。

このように求人件数が増加することは、学生にとって望ましい企業の採用試験を受けるチャンスにめぐまれるが、採用されるものは、かえって厳しくなるようである。

採用時期の早期化は、例年に増して激化しそうである。

四十三年十月末四三・六%、四十四年十月末五八・九%と早期化が目立ち、本年度は分末には五〇%以上のものが就職決定するとの見通しが行なわれるため、学生自身が人が多くなり、逆に経済学部の減低に悩んでいる状況である。

昭和四十五年度の求人会社は、実数四千七百三十五社であったが、昨年度の状態が続いているため、本年度も昨年度の求人会社数との増加が予想される。

昭和十四年度には五百百七社と昨年の状態が続いているため、本年度も昨年度の求人会社数との増加が予想される。

昨年度を上回る

見通し本年の

厳しくなる採用試験

積極的に求職活動すること等期待する。同じ新設の土木・建築・電子工学科の求人は、学生の絶対

図書館の窓口から

カード検索

昔からその必要があったにもかかわらず、「論語」・「孟子」・「詩経」・「礼記」・「易経」・「春秋」・「大学」・「中庸」・「孝経」・

昭和44年度学生生活実態調査

学生部

学生の希望や期待にマッチした厚生・相談などのサービス活動を行なうために、学生部が毎年実施している「学生活実態調査」の四十四年度分の集計が、このほど終った。

この調査では、学生の経済生活の実情だけでなく、生活時間、健康状態、友人関係、大学生活、悩みや関心、職業や進路についての考え方を総合的に把握しようとしたものである。

現在、結果の分析を進めているが、目立った内容の一部を中間報告的に紹介する。

この調査は、全学生から十人に一人の割合でランダムに抽出された二五〇三名（第一部二、〇七一名、第二部四三一名）に対し質問紙を郵送し、回答用紙を学生部事務室または学生部へ持参してもらうという方法で行なわれた。調査時期は昭和四十四年十一月下旬～十二月中旬で、回答数は第一部一、一六二名、第二部三三名、回答率は第一部五八％、第二部五六％であった。

学園祭の図書室で語り合う学生たち

経済生活

関大生は平均三人に二人は自宅住いである。学費は、第一部学生のほとんどは家庭の世話になっているが、第二部学生では自分で出しているものが多く、学費以外にも家庭からお金を全然出してもらっていないものが半数以上に達している。支出面ではレジャー費の不足感じているものが多い。

▼六～七割が自宅住まい

自宅から通学しているのは、第一部で七三％、第二部で六三％である。つまり、第一部では四人に一人が、また第二部では三人に一人が自宅以外で生活している。自宅以外のもので第一部では下宿住いが多いのに対し、第二部学生は借家・アパート・会社の独身寮などが多い。

▼学費――第二部学生の過半数が自力で

学費を〝全額家庭から〟出してもらっているものは、第一部では八五％あるのに対し、第二部ではその三分の二の六六％にすぎない。第二部学生の四四％は〝全額定職収入により〟学費を出しており、その他アルバイト収入・奨学金などを含め家庭の世話に全然なっていない学生が半数以上を占めている。とくに第二部の四年次になると七割以上が〝学費を全額〟自力で調達している。

▼家庭からの支給額――第一部と第二部は対照的

第二部学生の半数以上が自力で学費をつくり出しているという事実に対応して、家庭からの仕送りや支給額が〝七千円〟であるというものが五五％あるのに対し、第一部では八五％あるのに対し、第二部では八五％あるのに対し、第一部では三分の二の六六％にすぎない。

▼学費――第二部学生の過半数が自力で

学費を〝全額家庭から〟出してもらっているものは、第一部では八五％あるのに対し、第二部ではその三分の二の六六％にすぎない。第二部学生の四四％は〝全額定職収入により〟学費を出しており、その他アルバイト収入・奨学金などを含め家庭の世話に全然なっていない学生が半数以上を占めている。とくに第二部の四年次になると七割以上が〝学費を全額〟自力で調達している。

▼家庭からの支給額――第一部と第二部は対照的

第二部学生の半数以上が自力で学費をつくり出しているという事実に対応して、家庭からの仕送りや支給額が〝七千円〟であるというものが五五％あるのに対し、第一部では八五％あるのに対し、第二部では八五％あるのに対し、第一部では三分の二の六六％にすぎない。

▼奨学金希望者はまだ多い

奨学金を受けているものは第一部で紹一〇％であり、第二部では紹一〇％であるが、〝欲しい〟と希望するものは、第一部で三七％、第二部で三八％である。

▼アルバイト収入――レジャーへ

第一部の場合、四人のうち三人は〝ない〟という学生であるが、希望者が一人でも多く増えてほしいものである。

▼それでもレジャー費は不足

最も不足を感じる支出目は〝娯楽・社交費〟という学生が第一部で四六％、第二部で三二％でトップクラスを占めている。同程度に不足感が感じられているのは、第一部で〝図書教育費〟（二五％）第二部で〝衣料費〟（二二％）だが、〝旅行〟と〝娯楽・社交〟のレジャー関係費用の不足を感じるものは第一部で九％、第二部で四％で非常に多い。とくに第一部学生では高学年ほどこの傾向が強い。

▼一カ月間の支出額――四年次は一年次の一・五倍

月平均支出額の中央値は、第一部では九千三百円であるが、第二部では一万三千五百円である。月平均二万円以上を支出しているものが、第二部で三七％、第二部で三百円、第二部では一万三千四百円～二万九千円であって、その差は第二部でのほうが大きい。

勉学について

在籍している学部・学科を選んだのは「自分の学力・適性を考えて」というものが多く、また、ほぼ半数の学生は満足感をもっている。しかし、転学・転部を希望するものもかなりある。

▼学部・学科の選択――半数以上が自分の適性・学力に合ったもの

現在の学部・学科を選んだ理由は「自分の適性を考えて」という三〇％）、また「第一志望に入れたから」（第一部七四％、第二部六〇％）などが〝自分の学力・適性〟を考えて（第一部第一四％、第二部九％）を加えると、半数以上のものが、まず自分に合ったと考えているといえるであろう。そのほか〝将来の職業を考えて〟というものが多い（第一部一四％、第二部三一％）。

▼十人中八、九人が職業・進路に不安感をもっている

大多数のものが職業・進路の選択に安心を感じている。そのような安定感を〝少しは感じる〟というものは第一部五三％、第二部四五％であり、〝たいへん感じる〟かそれ程三三％、三二％を占めている。つまり職業や進路に不安感じないというものは、むしろ例外的であるといえるのである。

もっとも不安感が強いのは三年次であり、ほぼ八割が決っている。関大生の多数の関心事は自己の将来に対する職業・進路の問題であるともいえる。

悩みごとと関心

悩みごとがあっても〝誰にも相談しない〟というものが約三割いる。しかし多数のものは〝友人・同僚〟を相談相手としており（第一部五一％、第二部四一％）、〝家族〟へ悩みごとを聞いてもらう場合も比較的多い（第一部一一％、第二部一五％）。

▼学生相談室――知られているが利用されない

学生相談室の存在はほとんどの学生が知っているが（第一部八七％、第二部八五％）、それを利用する人は一部にすぎない。

▼悩みの相談相手は友人・同僚

関大生にとっての最大の悩みごとは〝職業と将来のこと〟である。次いで、むしろ〝健康〟、〝経済〟、〝人生について〟といった順位である。

▼悩みごとの内容は職業・進路に関することであって、その相談は主に友人・同僚にしているのが現状である。

▼悩みは職業・将来のこと

関大生にとっての最大の悩みごとは〝職業と将来のこと〟であり、その他アルバイト収入・奨学金などを含め家庭の世話に全然なっていない学生が半数以上を占めている。とくに第二部の四年次になると七割以上が〝学費を全額〟自力で調達している。

▼家庭からの支給額――第一部と第二部は対照的

第二部学生の半数以上が自力で学費をつくり出しているという事実に対応して、家庭からの仕送りや支給額が〝七千円〟であるというものが五五％あるのに対し、第一部では八五％あるのに対し、第二部では八五％あるのに対し、第一部では三分の二の六六％にすぎない。

▼奨学金希望者はまだ多い

奨学金を受けているものは第一部で紹一〇％であり、第二部では紹一〇％であるが、〝欲しい〟と希望するものは、第一部で三七％、第二部で三八％である。

▼アルバイト収入――レジャーへ

第一部の場合、四人のうち三人は〝ない〟という学生であるが、希望者が一人でも多く増えてほしいものである。

▼それでもレジャー費は不足

最も不足を感じる支出目は〝娯楽・社交費〟という学生が第一部で四六％、第二部で三二％でトップクラスを占めている。同程度に不足感が感じられているのは、第一部で〝図書教育費〟（二五％）第二部で〝衣料費〟（二二％）だが、〝旅行〟と〝娯楽・社交〟のレジャー関係費用の不足を感じるものは第一部で九％、第二部で四％で非常に多い。とくに第一部学生では高学年ほどこの傾向が強い。

▼一カ月間の支出額――四年次は一年次の一・五倍

月平均支出額の中央値は、第一部では九千三百円であるが、第二部では一万三千五百円である。月平均二万円以上を支出しているものが、第二部で三七％、第二部で三百円、第二部では一万三千四百円～二万九千円であって、その差は第二部でのほうが大きい。

進路と職業

職業選択の第一条件としてやはり〝自己の能力、適性に合っている〟（第一部三〇％、第二部二七％）ということよりも、むしろ〝やり甲斐と興味を感じる〟（第一部五〇％、第二部四八％）ということである。これらにくらべると〝独立していて自由な職業〟（第一部七％、第二部一％）、〝安心している〟（第一部一〇％、第二部八％）などは非常に少ない。

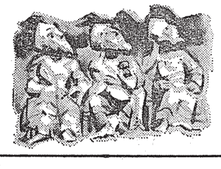
▼十人中八、九人が職業・進路に不安感をもっている

大多数のものが職業・進路の選択に安心を感じている。そのような安定感を〝少しは感じる〟というものは第一部五三％、第二部四五％であり、〝たいへん感じる〟かそれ程三三％、三二％を占めている。つまり職業や進路に不安感じないというものは、むしろ例外的であるといえるのである。

もっとも不安感が強いのは三年次であり、ほぼ八割が決っている。関大生の多数の関心事は自己の将来に対する職業・進路の問題であるともいえる。

▼転学、転部の希望

転学や転部については第一部で六八％、第二部で五五％が〝思わない〟と答え、現状に落ちつくことを考えているようである。しかし、第二部学生の三五％が〝転学はしないが転部はしたい〟という希望をもっており、第二部の一年次・二年次で二〇％強が転学希望である。



（4）臨時部支出

款	項	本年度予算額	前年度予算額	比較増、△減	
		千円	千円	千円	
1．施設費		210,910	112,957	97,953	
	1．建築費	35,000	55,620	△ 20,620	
	2．補修費	37,310	0	37,310	
	3．設備費	40,600	53,337	△ 12,737	
	4．土地購入費	98,000	4,000	94,000	
2．償還元金		541,390	575,060	△ 33,670	
	1．私学振興会償還金	53,810	36,420	17,390	
	2．銀行償還金	118,130	0	118,130	
	3．学債償還金	369 450	538,640	△ 169,190	
3．繰出金		26,000	75,800	△ 49,800	
	1．拡充資金特別会計	26,000	25,800	200	
	2．施設補修特別会計	0	50,000	△ 50,000	
臨時部支出計		778,300	763,817	14,483	
経常部・臨時部支出合計		3,769,960	3,610,395	159,565	

昭和45年度特別会計収支予算

（1）退職慰労金特別会計

項	本年度予算額	前年度予算額	比較増、△減	備考
収入	千円	千円	千円	
1．繰越金	194,329	74,634	119,695	
2．繰入金	172,620	202,000	△ 29,380	
4．雑収入	8,483	5,400	3,083	
合計	375,432	282,034	93,398	
支出				
1．支出金	72,620	87,705	△ 15,085	定年退職者 60,620千円 依願退職者 12,000
2．繰越金	302,812	194,329	108,483	
合計	375,432	282,034	93,398	

（2）年金基金特別会計

収入	千円	千円	千円	
1．繰越金	159,162	146,032	13,130	
2．繰入金	10,000	8,000	2,000	
3．雑収入	10,526	10,130	396	
合計	179,688	164,162	15,526	
支出				
1．支出金	8,000	5,000	3,000	普通年金 4,620千円 扶助料 360 一時年金 3,020
2．繰越金	171,688	159,162	12,526	
合計	179,688	164,162	15,526	

（3）奨学基金特別会計（愿明、山本、南、仁保、遠部、黒田、地山、各氏奨学基金）

収入	千円	千円	千円
1．繰越金	140	131	9
2．雑収入	10	9	1
合計	150	140	10
支出			
1．繰越金	150	140	10
合計	150	140	10

（4）奨学金特別会計

収入	千円	千円	千円	
1．繰越金	3,181	3,078	103	
2．繰入金	8,000	8,000	0	
3．償還金	2,500	2,000	500	本年度返還金
4．雑収入	112	103	9	
合計	13,793	13,181	612	
支出				
1．支出金	10,000	10,000	0	
2．繰越金	3,793	3,181	612	
合計	13,793	13,181	612	

（5）厚生資金特別会計

収入	千円	千円	千円	
1．繰越金	2,840	4,729	△ 1,889	
2．繰入金	3,000	3,500	△ 500	
3．償還金	7,960	6,310	1,650	償還金（住宅資金・厚生資金）
4．雑収入	2,017	1,301	716	貸付利子・（住宅資金・厚生資金）
合計	15,817	15,840	△ 23	
支出				
1．支出金	14,000	13,000	1,000	住宅資金貸付金 10,000千円 厚生資金貸付金 4,000
2．繰越金	1,817	2,840	△ 1,023	
合計	15,817	15,840	△ 23	

（6）拡充基金特別会計（武田氏よりの寄付によるもの）

収入	千円	千円	千円
1．繰越金	18	17	1
2．雑収入	1	1	0
合計	19	18	1
支出			
1．繰越金	19	18	1
合計	19	18	1

（7）拡充資金特別会計

収入	千円	千円	千円
1．繰越金	78,162	54,262	23,900
2．繰入金	26,000	25,800	200
3．雑収入	4,655	3,900	755
合計	108,817	83,962	24,855
支出			
1．繰出金	0	5,800	△ 5,800
2．繰越金	108,817	78,162	30,655
合計	108,817	83,962	24,855

（8）収益事業資金特別会計

収入	千円	千円	千円
1．繰越金	7,040	6,570	470
2．雑収入	487	470	17
合計	7,527	7,040	487
支出			
1．繰越金	7,527	7,040	487
合計	7,527	7,040	487

（9）寄付保険特別会計

収入	千円	千円	千円
1．繰越金	517	476	41
2．寄付保険金	2	2	0
3．雑収入	33	39	△ 6
合計	552	517	35
支出			
1．繰越金	552	517	35
合計	552	517	35

（10）出版事業資金特別会計

収入	千円	千円	千円	
1．繰越金	1,691	1,453	238	
2．事業収入	4,513	5,680	△ 1,167	教科書及び学術図書等売上代
3．雑収入	34	60	△ 26	
合計	6,238	7,193	△ 955	
支出				
1．支出金	5,244	5,502	△ 258	印刷費 3,954千円 印税 890 管理費 400
2．繰越金	994	1,691	△ 697	
合計	6,238	7,193	△ 955	

（11）施設補修特別会計

収入	千円	千円	千円
1．繰越金	50,000	0	50,000
2．繰入金	0	50,000	△ 50,000
3．雑収入	2,150	0	2,150
合計	52,150	50,000	2,150
支出			
1．繰出金	29,410	0	29,410
2．繰越金	22,740	50,000	△ 27,260
合計	52,150	50,000	2,150

スコットランドの旅

アダム・スミスの故郷を訪ねて

重田晃一

十月四日。久し振りに青空がひろがり、日光が街路いっぱいに跳ねていた。昨日、驟雨に追われながら街を見物して歩いたのは嘘のようだった。でも風は冷たく、街のあちこちではしきりに枯葉が舞い、もう冬がそこまで忍び寄っている気配であった。

新学期のはじまるまでにスコットランドを訪れておこう、と衆議一決して、私たちは二日前の朝ロンドンを発ってエディンバラに来ていたのであった。だが今日は藤本氏（神戸大）はふたたびロンドンの下宿へ、来住、本庄両氏はグラースゴウへ、こうして私はただ独りでエディンバラから汽車で約四十分のカーコールディへむかうことになった。アダム・スミスが生まれ育った街の姿を、この目で直接たしかめておきたかったからである。手荷物一切は駅に預け水田教授の「社会思想史の旅」一巻と万メラを手に車中の人となった。

朝少し早かったせいだろうか、スミス記念館の博物館の扉は固く閉ざされたままであった。ふと見渡すと老婆が一人、別の入口を入るのが見えた。試みにそのあとについて行くと、こちらは図書館だった。

受付で来意を告げると、司書らしい中年の婦人にひきあわせてくれた。スミス関係の資料をということで見せてもらったのは、新聞の切り抜きの類であったが、それでもいろいろ気をつかってもらい、歓待されたのは旅の空だけに心にしみた。イギリスではどこに行っても、図書館の人達の親切なのには、いつものことながら感心させられる。狭い閲覧室はひっそりと静まりかえり、あちこちに散らばって腰を下した老人たちが、ページをめくる音がきこえるだけである。私もこの老人たちの仲間入りをして、閲覧室の一隅で、さきほど借りた切り抜き類に目を通す。書簡、書物などを見せては、一つ一つていねいに説明してくれた。だが私を驚かしたのは、「一寸失礼」といって、中央公論社版「世界の名著」の「アダム・スミス」をもってきたことだった。同書の口絵写真の一つに有名な「アダム・スミス小路」の入口の遠景写真がのっているが、よく見ると、その中に豆粒位の人物が一人写っている。

「誰れだかおわかりですか」

ニヤニヤ笑いながらフッド氏がたずねる。

アダム・スミス小路

ことにした。

「これは、これは。違いところからほんとうにようこそ。日本はどこの大学から……」

肩を叩かんばかりに、ニコニコ笑いながら中年の小肥りの人が近寄ってきた。澄んだ秋の空気に勝い大きな声がはぜて、静謐な雰囲気がポッカリ割れた感じであった。博物館の主任のW・フッド氏であった。司書のミセスが私の来意を伝え、案内を頼んでくれたらしかった。

スミスの生誕地なのに訪るに足る蒐集がなくて、と弁解しながら、それでもスミス関係の遺品、

バス停よりカーコールディの街並をのぞむ

「さあ、誰れでしょう。わかりませんね」

すると、鼻の頭を指さしながら、

「この私ですよ」

と、得意そうにいう。

「では、この写真を通して、日本では何千人の人があなたを知っているわけですね」

とひやかすと、満更でもなさそうな顔つきで、

「でもね、こんなタイニイ・スポットでは、現にあなただって、この私だということがわからなかったではありませんか」

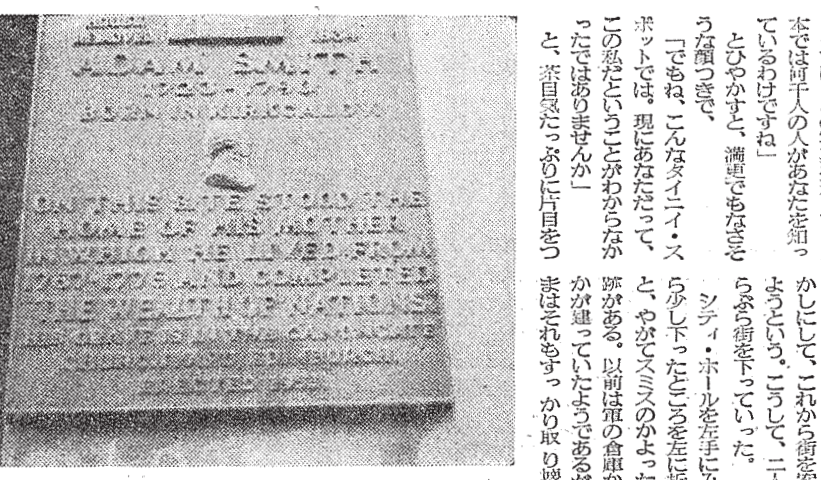
と、茶目気たっぷりに片目をつむってみせた。

いずれ日本に帰ったら、機会をみて、もっと大きな写真であなたのことを紹介しよう、こういって一緒に前庭に出た。ところが、いざシャッターを切ろうとすると、一寸待てという。何かとおもったら、博物館所蔵のスミスが生前使っていたインク・スタンドを勝手に持ち出してきて、これで現代のアダム・スミスだとふざけながらポーズをつくった。どこまでも気さくで陽気なスコットランド人である。

それやこれやですっかり打ち解け、あげくは勤務の方はほったらかしにして、これから街を案内しようという。こうして、二人でぶらぶら街を下っていった。

シティ・ホールを左手にみながら少し下ったところを左に折れると、やがてスミスのかよった学校跡がある。以前は軍の倉庫かなにかが建っていたようであるが、いまはそれもすっかり取り壊されて、その傍の建物の壁に記念の石板がはめこまれていた。それによると、学校は一七三五年にタウン・カウンシルによって創設され、一八四三年に閉鎖されたという。さらに、一八一六年から一八年まで、カーライルがスクールマスターであったと記されていた。

その場にしばらく佇んだ後、私たちはスミスの旧居跡を訪ねることにした。それはこのまちの中心街であるハイ・ストリートにあるのだが、かつてこの旧居跡を訪ねられた水田教授は、そのたずまいを、つぎのような筆で伝えておられる。



スミス旧居跡のブロンズ板

「ハイ・ストリートにでると、不ぞろいな軒なみが、ふるい町のおもかげをつたえている。二〇二号のクライズデール銀行の入口には、ブロンズ板がはめこんであって、それには、スミスの胸像の浮彫のしたに、つぎのようにきざまれている。House removed 1834／Adam Smith 1723-1790／Born in Kirkcaldy. On this site stood the／home of his mother／in which he lived from／1767-1776 and comp leted／"the welth of nations"……」（「社会思想史の旅」二二六頁）

この銀行と隣りの家との間にある狭く細長い通りが「アダム・スミス小路」であって、スミスの旧居はこの辺にあったらしい。

私の漠然、あやしげな英語にもかかわらず、互になんとなく気持が通じあって、私たちがひっそりとしたこの小路を入っていったのは、もう夕近くではなかったろうか。つきあたりは半ば廃れた花園であった。その一隅にピロティ式

ウイリアル・フッド氏

といえばきこえはいいが、一階は物置にちかい、そして二階が住居になった赤煉瓦の家が建っている。私たちがそこまで辿りついたとき、チョビ髭の小柄な親父さんが二階の住居から降りてきた。互に旧知らしく、フッド氏がさっそく私を紹介してくれた。昔、スミスが住んでいた頃は海がすぐそこまで迫っていて、「国富論」の執筆に疲れると、スミスはここから海に降りていったのだ、と語ってくれたのは、果して二人のうちのどちらであったのか――。

四囲は静まりかえって物音一つしない。そのしじまを破って、とぎれとぎれに低い響きが近づいてはまた消えていくが、あれは高速道路を疾走する車の音であろうか。いつしかものおもいに耽って、私は語の仲間からはずれていた。

と、ふたたび私の耳に英語がとびこんできた。フッド氏がたずねているのであった。

「当地へは何に乗っておいでしたか」

「汽車で」

「では、違った風景も眺められるし、帰りはバスにされては。停留所はすぐそこだから、ついでに送っていきましょう」

チョビ髭の親父さんにお礼をいって、私たちはもときた道をもどった。

海のそばを立派なドライブ・ウエイが走っていて、バス停はそこにあった。そのバス停から海に面して左手遠くに、岬が突き出しているのがモヤに煙って見えたが、その辺を指さしながら、バスを待つ間にも、フッド氏はカーコールディ一帯の歴史を語ってくれるのであった。

でも、やがてバスが到着した。私たちは固い握手を交わして別れを告げた。

フォースの入江を越えてエディンバラに帰ったら、時計ははや二時近くをさしていた。

（経済学部教授）

遺品、旧居に往時偲ぶ

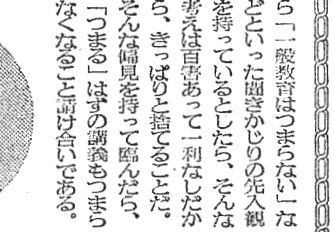
陽気で親切なフッド氏

大学における一般教育の意味

教養部長　藤井啓行

今年もまた多くの新入生諸君を迎えて大学構内は活気に充ちを授業もいよいよこれから軌道に乗ろうとしている。だがまた一方、「五月病」などというような、新入生にとって最初の大きな危機が訪れる可能性のある時期にも、いまは当っている。その対処の仕方によって、今後の大学生活が大きく左右されることにもなりかねない。この時期をうまく切り抜け、これは何も新入生に限ったことではないが、各人の短い一生に折角与えられた貴重な大学生活において、何とか勉強にも人間的な交わりにも豊かな実りをもたらし、二度と戻らぬ青春に悔いを残さないようにしてもらいたいものだと思う。

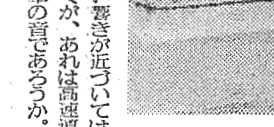
さて、大学にはいって最初にぶつかる大きな問題は、一般教育への対応のあり方であろう。これについてはまず、もしも諸君がまだよくわからないさきから「一般教育はつまらない」などといった聞きかじりの先入観を持っているとしたら、そんな考えは百害あって一利なしだから、きっぱりと捨てることだ。そんな偏見を持って臨んだら、「つまる」はずの講義もつまらなくなること請け合いである。



大学にはいったからには一日も早く専門に打ちこみたいという気持は、よく理解できる。だが、大衆化されたいまの大学の四年間に行われる専門教育の目差すところについては、ここでよく考えてみる必要があろう。学生諸君の求める専門教育なるものが、社会に出てすぐ役に立つといった卑近な、単にいわゆる実利的・技術的なもののみをもし仮りに指すのであれば、これは論外だが、またそうかと言って、「学問の蘊奥を極める」ことも、いまの学部に求めても到底無理な話でしかない。それではその目標はというと、学生に各専門を通じて学問のきびしさを感得させ、専攻の学問領域についての基礎的な識を与えるところにあるというべきで、本当の専門研究という立場からみれば、その入門・修練の時期がこの学部四年間なのである。そうであってみれば、専門教育と一般教育との間には、諸君が一般教育に力を入れているのは、高校段階のそれとは本質的に異なるところに目標を置いているからに他ならない。大学受験ということを前提にした学科目内容を遠く離れて、自主的・創造的なものの見方を広い領域にわたって養うというのがその趣旨である。これに支えられない専門知識など弱々しい限りである。だからこそ、大学教育の改革の方向としては、一般教育を更に重視し、四年間を通じて配当しようとするような考えかたも出てきているのである。そういう点からすると、現行の一般教育科目一年次集中には問題があることになるが、改革の問題は現在検討中であり、現行に即しての補いは、諸君が在学中を通じ、読書などによって積極的につけてゆくことが望まれる。

私のような旧制度の大学教育を受けた者から見ると、いろんな学部のすぐれた専門家の講義を一般教育という形で自由に聴けるのは、いまの大学生の特権のように思えて、羨ましいことだ。ひとたび大学を出てしまえば、専門外の知識にたいする必要や欲求が出てくることが多くても、直接その道の専門家に教えをこうということは容易に出来るものではない。今うかうかと過ごした者は、将来かならずや後悔の臍を噬むことになるだろうと、私は思う。研究の中心は各人の専門領域にしっかと据えた上で、他の学問の広い世界にも常に新鮮な眼を注いでゆくのは、その人の精神の柔軟さ・著々しさを立証するものである。

編集後記



関西大学通信創刊以来はじめての六ページ建てになった。知ってもらいたいことが多かったからだ。まず今年度の予算のナマの資料を載せて大学の経理の実情を正確に把握してもらうことを意図した。

はや就職試験のシーズンになった。就職部の掲示に見入る学生諸君の表情も落ち着かぬようだ。四年生諸君が働き甲斐のある職業を選ばれることを祈りたい。また学生部で分析中の学生生活実態調査の結果の一部を紹介した。この調査結果が、学生諸君が自分自身をかえりみる機会にもなれば有難いし、有効に活かされることを期待したい。

新入生諸君のために教養部長の藤井啓行教授から一般教育の意義を述べていただいた専門的知識を発展させる基礎が一般教育のなかにあることを認識してもらえると思う。

大学が改革への意欲を新たにしているとき、また一部の学生の間に力の衝突が残っていることは残念だ。理性と良識にもとづく相互理解が一層進められるようにすべての者が努力しなければならない。われわれの〝通信〟がそのための一助となりうることを信じ、第九号の編集を終った。